

ワールドカップとポーランド

加藤忠郎

平成三十年六月二十八日のワールドカップ豫選の日本對ポーランド戦、試合終了前の十分間の西野監督の采配につきては、數多の人、贊否兩論述べてをり、今更素人の予ごときが言ふことも無けれども、一言感想を述べてみむと欲す。

日本は一對〇と負けてゐたるも、そのまゝ試合終了せばイエローカードの少なき決勝リーグに進出し得る状況なりき。決勝リーグにて活躍するが目的なれば、ドーハの時のやうに侍ジャパン振りを發揮し過ぎ失敗するを避け、着實に決勝リーグに残る道を選びしこそ間違ひなき采配なれ。事實、決勝リーグにては惜しくもベルギーに三對二と逆轉せられはせしかども途中まではベスト八の夢を見させて貰ひぬ。因みにベルギーはブラジルに勝ち準決勝に進み、フランスに負けはしたるが三位決定戦にてイングランドに勝ちたり。予ポーランドとの試合の中継は觀ざれども、觀てゐたる家内の語るには、ポーランドは最後の十分間は殆ど攻むる意思を見せず、日本チームがパスボールにて時間を潰すのをなすがまゝにせりと言ふ。既に豫選リーグ敗退が決まりてをり、自國の名譽のためには一對〇にても勝たばよし、餘計なことをし、引き分けにはしたからずと言ふことではなからんやとの家内の感想なり。確かに其が大きな理由ならん。されど、兩國チームの思はく期せずして合致せるは尋常ならざる和親のめぐみたりけるか。

シベリアは長き間ポーランド愛國者の流刑の地なりき。一九一八年（大正八年）、ポーランドのロシアより漸く獨立せし頃、十數萬人のポーランド人、此の地にありき。孤兒たちなりと祖國に送り返さんとせしが、一九二〇年（大正九年）、ポーランドとソ連との間に戦争始まり、シベリア鐵道にて送り返すこと能はず。救済委員會は歐米諸國に援助を求めしがことごとく拒否されたるも、日本が救援を引き受けき。數次にわたり七六五人の孤兒たちを日本に送り、治療・休養せしめたる後、祖國ポーランドに送り届けたり。日本滞在中は厚き待遇を受け横濱より出發する時、孤兒たちは保母さん達との別れを惜しみ、「ありがたう」を繰りかへし、「君が代」を齊唱し感謝の氣持を表はしたりと言ふ。日本への感謝を忘るべからずと言ふことにて、大正天皇の節子（さだこ）皇后や輸送船香取丸に因みて「サダコ」や「カトリ」の名前を自分の子たちに付けし孤兒も少なからずありと言ふ。孤兒たちの歸還のことはトルコと違ひ教科書には書かれてゐなければども、生き證人より口傳へせられてをり、多くのポーランド人其を知る。

ご承知のやうに、和歌山沖に難破せるトルコのエルトゥールル號の救助せられし遭難者を明治天皇がトルコまで送り届けさせし事實はトルコの教科書にも載りたるが、このことを思誼に感じ、イラン・イラク戦争の時にトルコ航空が日本人救出の便を出してくれたことは映畫化もせられ有名なる物語なり。

日本とポーランドの間には、シベリアの孤兒の歸還以前にも密接なる交流がありけり。其

は日露戦争の時のことなり。ロシア軍の捕虜達が愛媛縣松山市の收容所に收容せられてゐたが、日本海海戦にての日本の勝利が傳はるや、自國の勝利の如く狂喜せるロシア兵士がありき。ロシアに徴兵せられしポーランド人なり。日本人は國際法を遵守し、捕虜達を人道的に扱ひ、ピクニックに誘ひたりし、歡待せしかば、ポーランドに歸るや、子たちに「日本人に出會ふことあらば恩返しをせよ」と言ふのが口癖なりきと言ふ。

(令和三年六月二十四日受附)